

2022年度「漢方医学教育研究助成」採択決定者一覧

一般研究助成：6件/11件			
No.	研究題目	施設名・所属（役職）	申請者（代表）
	研究要旨		
1	「医学生を対象にした随証治療による漢方処方選択の確立」	弘前大学医学部附属病院 皮膚科 診療講師	皆川 智子
	漢方医学で考えられる病態生理：‘証’や‘随証治療’を理解し、実践できるようにするため、弘前大学医学部医学研究科4年生の臨床薬理・和漢薬学講義において、漢方医学の基礎理論（陰陽説，五行説，三陰三陽），漢方医学的診察法（四診：望診，聴診，問診，切診），‘気血水’の所見，寒熱虚实の‘証’の判断について講義する．希望者にはオリジナルの動画とスライドにより事前e-learningを行った後，腹診シュミレーターで実技指導を行い，4年時と5年時にアンケート調査を行い，医学生が随証治療により，適した漢方を選択できるようになることを目指す．		
2	「科学的エビデンスを取り入れた鍼灸に関わる医学教育の研究開発」	富山大学附属病院医療情報・経営戦略部・教授	高岡 裕
	日本漢方医学教育協議会では、医学教育モデル・コア・カリキュラムに対応した講義スライド提供や『漢方医学講義』を出版した。漢方の項では臨床薬理的な解説もされており、分子細胞生物学を学んだ医学生が受け入れやすい内容である。しかし、鍼灸の項では自律神経系を中心とする旧来の説明が主で、学生が学んできた分子細胞生物学的な解説は非常に乏しい。そこで鍼灸の基礎研究、臨床研究の最新の研究成果を取り入れた講義スライドを作成し、申請者が各大学（医学部・薬学部）で講義する。そして、講義後の学生への授業アンケート調査を基に講義内容をブラッシュアップし、分子医学やデータ科学に対応した鍼灸教育の内容を完成させる。		
3	「卒後漢方教育への漢方医学eラーニング〈臨床応用編〉の導入」	東海大学医学部専門診療学系漢方医学・准教授	中田 佳延
	本研究の目的は、漢方医学eラーニングコース〈基礎編〉の発展として、前期あるいは後期研修医が臨床各科で応用できるeラーニングコース〈臨床応用編〉を開発することである。方法は、漢方を応用しやすい臨床12領域を決定した後、各領域における疾患の捉え方、頻用処方と鑑別、症例、確認問題から構成される10～12分のコンテンツを作成し、プロのナレーターによる音声収録を行う。これを既存のサーバーとeラーニングシステムを用い、主に神奈川県内の臨床研修指定病院に勤務する研修医を対象に試験的に導入する。評価は、受講者への受講前後でのアンケート、プレテストおよびポストテストの得点により行う。成果は学会および論文で発表する。		
4	「漢方医学への学習意欲向上プロセスの探索 ～医学生の漢方教育×Long COVIDプロジェクトを通して～」	岡山大学病院 総合内科・総合診療科 助教	徳増 一樹
	COVID-19罹患後症状 (Long COVID) は、主症状が複数かつ多岐にわたり、個性性が高く、患者それぞれの身体症状を包括的に把握し診療する必要がある。現在行っている臨床実習の中で、LongCOVIDの患者を診療することで、医学生は包括的に病態をとらえる漢方医学の有用性に気づき、漢方医学への学習意欲が向上していると実感している。しかし、その学習意欲が向上するプロセスは明らかではない。 本研究では、医学生がLong COVIDの患者を実際に診療することを軸とした「漢方教育×LongCOVIDプロジェクト」を実施し、漢方医学への重要性認知、学習意欲向上へつながるプロセスを解明することが目的である。		
5	「漢方医学に関する診療や教育支援のための証・方剤選択アプリケーションツール開発」	京都府立医科大学総合医療医学教育学教室・講師	丹羽 文俊
	漢方医学の症候や方剤は客観的定量的評価の難しさゆえに理解と浸透が十分進まないのが現状である。方剤選択の最適化を目標とした学習を行なう上で、今回我々は症候から最適な方剤選択をシミュレーションするアプリケーションツールの開発・導入を計画している。このアプリの特筆すべき特徴は、証に対応して選択する方剤の適性を組み合わせ最適化モデルを用いて定量化し（視覚化し）、初学者にも分かりやすくフィードバックできる点にある。実用性や使用効果については臨床や教育の場面でアンケート調査を通じて検証するものとする。このような学習用アプリが実現すれば、漢方医学のさらなる理解と浸透の一助となるものと考える。		
6	「教育DXモデルとしての漢方医学教育に資する多職種連携教育」	新潟大学大学院医歯学総合研究科医学教育センター 准教授	河内 泉
	本研究は、教育DXモデルとして①漢方医学、②多職種連携教育 (IPE), ③オンライン教育を統合・推進することにより、新たに漢方医学教育に資するオンラインIPEを実践し、その教育効果を検証することを目的とする。具体的には、(1) 学修を促進する「漢方医学教育に資するIPEプログラム」の構築、(2) オンラインIPEの教育効果のエビデンスの集積、(3) IPEを運営するためのFDの構築、(4) 漢方医学教育・IPEに有用なデジタル・コンテンツの作成を行う。オンラインで運用可能な「漢方医学に資するIPE」の開発・構築は、組織・国を越えたIPEへ発展する可能性があり、グローバル・医療過疎地域教育継続への波及が期待される。		

グループ研究助成：2件/3件			
No.	研究題目	施設名・所属（役職）	申請者（代表）
	研究要旨		
1	「Virtual University of Kampo medicine（漢方版の放送大学）構想と実証実験」	千葉大学医学部附属病院和漢診療科 診療教授	並木 隆雄
	近年、急速に普及したオンライン講義を背景に対面を前提に考えていた「漢方医学の教育」の多くの時間を、e-Learning を含む録画授業やライブ放映で行うことが可能になった。また全国一律で困難であった漢方医学教育を同質に行うことで漢方の国試出題の可能性がある。また、研修医向けの中級以上のコースやさらに専門医レベル以上の次世代の教育者を育てるFaculty developmentを実施できる。この漢方版放送大学ともいえるシステムにより、通年型教育並びに昇級試験を設けることでモチベーションを高める。さらに将来、このシステムを英語教育化することで世界に漢方医学を発信するロールモデルにすることができる。		
2	「橈骨脈波の定量的解析データに基づく脈診シミュレータの開発」	東北大学 加齢医学研究所 助教	山田 昭博
	漢方医学において脈診は、最も基本的な診察方法のひとつである。脈診では橈骨動脈を触診し、脈の強弱や血管の解剖学的特性など多岐にわたる病態を診察できる手技を習得する必要があるが、脈診を学習できるシミュレータはこれまでにない。我々は脈診手技に注目し、物理的なセンサによりその波形を客観的定量的に診断する「脈診器」の開発を進めてきた。本研究では、脈診器の定量的な解析データをもとに、さまざまな病態の脈波と物理解剖学的特性を再現できる脈診教育用シミュレータの開発を目指す。これにより医学教育過程において、標準的な脈診手技とさまざまな病態を簡便かつ客観性高く学ぶ事ができるトレーニングシステムを提供できる。		